

金属工芸の小宇宙

— 高精細画像でみる刀装具 —

第3回公開研究会

講師

黒川古文化研究所研究員

川見 典久氏

場所 (共催)

黒川古文化研究所

開催日

2010年11月13日



図 1-1 筭

図 1-2 目貫

図 1-3 小柄

図 1 後藤頭乗 鈴虫図三所物

刀装具の名称と後藤家について

川見

黒川古文化研究所の研究員、川見です。どうぞよろしくお願いします。

テレビや映画などで時代劇を見ると、江戸時代の武士は2本の刀と脇差というのを差しておりますが、そこには飾り金具がついています。手を握る部分の柄にある「目貫」、それから鞘の部分に、差したときに人から見える側についている「筭」、これは髪を整えるものです。そして、その裏側には「小柄」があり、小刀がついています。それから、そのほかには柄の両端、鐔のある方側に「縁」、また、柄頭のほうに「頭」という金具がついています。いまから見ていただくのは、主にそれらの金具になります。

さて、これらの刀装具の作り手の中心になるのは、幕府のお抱え工であった「後藤家」でした。初代は室町幕府8代将軍の義政に仕えた後藤祐乗で、その

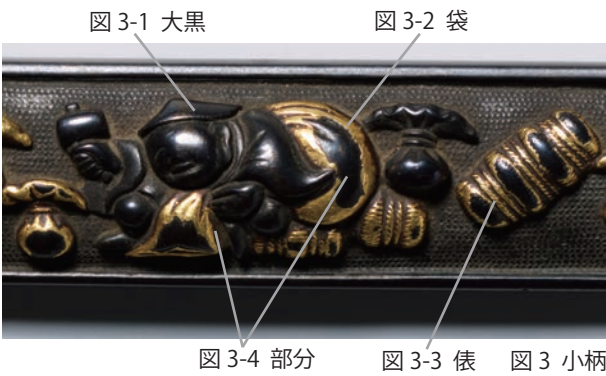
後、江戸時代を通じて活躍した家柄です。その人たちが主に作っていたのが三所物(図1)といわれる筭(図1-1)、目貫(図1-2)、そして小柄(図1-3)です。小柄は本来、小刀がつくものですが、本作は握る部分の柄だけが現在、収蔵されています。これらはすべて黒い金属、赤銅でできています。後藤家が基本とした技法に「色上」というものがあり、銅に微量の金を混ぜ、特殊な溶液につけて煮ることによって真っ黒にします。この基本的な技法の上に、文様の部分に金とか銀を施しているものや、筭と小柄の余白部分に魚々子という小さな魚の卵のような文様を打ち並べたものもあります。

金を用いた作品例

まず、金を用いた作品を紹介したいと思います。本作品(図2)は目貫がなく、小柄と筭のセットで収蔵されているものです。小柄(図3)を見てみますと、かなり高さのある大黒(図3-1)の文様があります。大黒が



図2 伝後藤宗乗 恵比寿大黒図二所物



持つ袋(図3-2)や、俵(図3-3)の部分に金がありますが、このような部分(図3-4)には黒い地が見えています。これは当初からこうだったわけではなく、おそらく、金のはがれてしまったのでしょう。つまり、元々は金が全て覆っていたのですが、現在は下から黒い赤銅の地がみえています。ここから、これらの文様は、上から金の薄い板をかぶせる「うつとり」という技法を用いていることがわかります。また、袋の中心部が完全にはがれてしまっていることから、この時代は全面を接着するのではなくて、周りの部分でだけで止めていたようです。よって、このような部分がはがれてしまうことがあり、古いものには、よく見られる様態です。

では、筭(図4)を見てみましょう。こちらの文様も恵比寿(図4-1)と大黒(図4-2)です。恵比寿の方を見てみますと、ここ(図4-3)に金を使っています。これは先ほどの、薄い金の板をかぶせるという技法で



はなく、この部分に鑿(たがね)で穴をあけ、へこませた上に金を埋め込む「象嵌(そうがま)」といった技法を使っています。このように基本的には、薄板の金や銀で覆う方法、あるいは彫ったところに金や銀をはめ込み、象嵌をしていく方法で、いろいろな文様を表しています。以上のような物が、後藤家の刀装具です。

文様の比較による時代の考察 — 枇杷図三所物 —

ところで、三所物は3点1組で收藏されています。しかし細かくみていくと、その3点の中で違いがあるものが見受けられます。なかには銘が切ってあったり、後藤家の中で鑑定がなされて、誰々作としてセットで伝わっているものでさえ、3点の中で違いがあります。つまり、後世の人間によって、どれか1つしかないのに2つ足し増しされているものや、2つしかないのに1つ足し増し、1組にされている物があるように思います。

その例として、次の作品(図5)を見てみましょう。これは枇杷を表したもので、枝、葉があって実がついています。実の部分は先ほどと同じ技法で、金の薄板をこの丸い実(図6-1)にかぶせています。同じ図柄で、目貫、小柄と筭があるのですが、詳細に見てみると3作品の異なる点が出てきます。では、目貫と小柄を比べてみましょう。まず、目貫を詳しく見ますと、ヘタの部分(図6-2)は金を丸く抜き、下地の黒い部分、赤銅を出すことによって表しています。また、ヘタの黒い部分の方向が一つ一つ違って、実がどちらを向いているかということを考慮しています。一方、小柄の枇杷の実(図6-3)のヘタは黒くなっていません。金を抜いている目貫に対し、小柄のびわの実は、金を抜いておらず、ただへこませているだけです。また、こ



図5 枇杷図三所物



のへたの方向を見ますと、小柄は一つをのぞいて全て同じ方向を向いています。まず、この点で作っている人の意識が全く違うことがわかります。

同じように葉を比較しますと、小柄の葉は、まわりにギザギザが彫っており、中心に葉脈があります。葉脈から、鑿の線がでていて、ここに鑿で点(図6-4)が打ってあります。一方、目貫のほうでは栗のようなもの(図6-5)がついていて、これは銀の粒を象嵌しています。また、葉の形もよくみますと全く違ってきます。目貫は先に行くに従って、緩やかにカーブしながら細くなっているのに対し、小柄の方は葉先に行くまで少し太いような感じがします。

では、これらを比べ、出来が良いのはどちらかと考えると、よりきちんと表現されているという点では目貫の方がいいと思われれます。では、制作年代が違うのか。違うのであればどちらが古いのか。または同時代のもので、作っている人が違うのか。細かく見ますと、表面の状態などから、目貫のほうの方が明らかに古そうに見えます。というのも、目貫の表面は、角が丸くなっているのです。これは制作当初から多少丸かった、ということもあるかもしれませんが、時代を経ることによって擦れにより少しずつ丸くなってきたとも考えられます。彫りの部分もくらべてみますと、小柄は角が鋭いまま残っていますが、目貫は擦り切れて埋まってきて

しまっています。したがって、小柄の方はかなり時代が下ったものであろうと思います。どの時点でなされたかはわかりませんが、江戸時代、もしくは近代になってから、別々に存在したものを一緒にして売ろうとしたのでしょうか。恐らくはこの目貫だけが、古いものであり、筈と小柄は新しいものだと考えられます。

後藤家で鑑定する場合には、何代目の、どの作者であるのか、また作者の特徴がきちっとわかることがあるかもしれませんが、これを見る限りは、そのような特徴がきちっと区別されているようには思えません。そこで、まずは時代性を考える方が重要だろうと思われれます。このような同じ画題、意匠、デザインのもの比べれば、その時代の前後関係は分かります。このような物で、きちっと一個一個の技法や、作っている人の意識を比べていけば、どの時代にどのようなものが作られ、それらは時代によってどう違うのかということが分かってきます。

文様の比較による時代の考察

—弓に^{えびら}籠図 大小目貫—

では次の作品(図7 弓に籠図 大小目貫)にいきましょう。この作品の目貫(図8)には、弓と矢がデザインされています。とても小さいものなのですが、矢の



図7 弓に^{えびら}箆図 大小目貫

入れ物 (図 8-1) があって、そこに矢がささっています。それに紐 (図 8-2) を絡ませ、弓を取り合わせてデザインしています。よく見ますと、この矢をいれる入れ物 (箆) に金を埋め込み、何かを表しています。これは家紋などによくある桐 (図 9-1) です。これが葉 (図 9-2) で、花 (図 9-3) が付いています。よく見てほしい点は葉の表現です。これは葉だとわかるようにふくらみをもたせながら彫ってあります。また、入れ物には5本の矢がささっています。そのうちの1本はこの入れ物の中に入っておらず、外に出ています。この矢の先は銀の粒を境に二股に分かれています。これは鏑矢 (図 8-3) といわれる矢で、金色の紐 (図 8-4) で結わえています。この矢の羽 (図 8-5) の部分も細かく彫られており、この部分は銀で象嵌をしています。おそらくは山鳥の羽であるということがよくわかるようにしているのでしょう。

さて、この目貫はセットで収蔵されています。小刀がついている小柄と、小さな目貫と大きな目貫ですが、今回展示しているのは大きな目貫だけです。この小柄と大きな目貫を比較しますと、展示していない理由がわかってきます。

小柄の模様も、デザインは同じようなもので、矢をいれる入れ物があり、そこに矢がささっています。そして弓があり、紐で結ばれています。しかし、細かく見ると違いが見えてきます。小柄にも同じような桐の



図 9-1 桐 図 9-2 葉 図 9-3 花

家紋がありますが、桐の葉 (図 10-1) は、ただ線がひいてあるだけです。また、目貫には花があったのに、小柄は十字 (図 10-2) を彫っているだけです。また下側には桐の家紋はありません。そのかわりに下地に唐草のような点線 (図 10-3) が彫ってあります。また、先程は鏑矢 (図 8-3) 一本が外側についていました。一応、小柄にもついています。先の表現が粗く、鏑矢なのか何なのかよく分からなくなっています。また、目貫の鏑矢は金の紐で結われていたのですが、小柄の鏑矢の金の紐 (図 10-4) は結っているようには見えません。

矢の羽 (図 8-4) の部分も目貫は、もう少し分厚く銀が用いられ、細かく線がひいてあったのですが、小柄の方の表現はかなり落ちています。

このように比べてみますと、出来は小柄のほうが格



図 8-2 紐 図 8-3 鏑矢 図 8-4 金色の紐

図 8-1 矢の入れ物 図 8-4 矢の羽 図 8 目貫



図 10-3 唐草のような点線 図 10-4 金の紐

図 10-2 十字 図 10-1 桐の葉

段に下がりますし、時代的にも相当後のものだろうとおもわれます。よって、本来、これらはセットではなかったのではないかと考えられ、一番出来の良い大きな目貫だけを今回展示しています。

文様の比較による時代の考察
—虎獅子図目貫—

後藤家の中で多い画題は獅子や龍などで、これ(図11)は獅子の目貫です。デザイン的には江戸時代通じて同じような獅子が彫られています。本作品におい

て着目してほしい点は、このわき腹の部分(図12-1)です。腹部がはっており、ふくらみがみてとれます。そこに線が刻まれ、あばら骨が浮き出るように表現されています。

さて、似たような獅子の目貫が他にも2点あるので比べてみましょう。その一点目の作品(図13)です。まず、金の色ですが、明らかに先ほどのものよりも、少し悪く見えます。銀などが混じったのか、ちょっと薄い色にみえます。また、先ほどの獅子にくらべ、腹部(図14-1)のあばらは、単なる線で表現されており、立体感がありません。



図11 虎獅子図目貫



図13 虎獅子図目貫



図15 虎獅子図目貫



図 12-1 わき腹の部分



図 14-1 腹部



図 16-1 腹部

次の作品にいきましょう。この作品（図 15）は、大きい獅子が金で、小さい獅子が銀で表してあります。同じようなデザインですが、腹部（図 16-1）に着目しますと、あばらの位置はおかしく、ただ3本線をひいているだけの表現になっておます。このようなことから、代々同じ主題が後藤家の中でやり続けられていく中で、各部のデザインの意味を分からずに彫っているものもたくさんあることがわかります。

文様の比較による時代の考察 —五疋龍図 目貫—

次の作品にいきましょう。このような龍もよくある図柄です。この作品（図 17）は金の質は割とよく、時代的にもそれなりに古いものだと思います。もう一点（図 18）の同じ龍の主題のもの比べてみましょう。こちらは割りと大きめの目貫で、5匹の龍がからみあっています。頭も5つあります。では先ほどのものとヒゲ（図 19）の部分と比較しましょう。左側は力のないようなヒゲで、一本のひげとしてつながっている感じがしません。一方、右側はちゃんと力強いヒゲになっています。

他にもたくさん色々違う所が見えるので、龍または獅子にしても、一つ一つ同じものを見比べていけば、表面の状態、使われている技法、または傷などの違いから、時代がわかってくるであろうと考えられます

質疑応答

質問者

恵比寿と大黒の笄、小柄について質問させていただきます。文様に金をはがれた痕があるというのはわかりましたが、それ以降の時代になりますと、たくさん色が使われています。本作は赤銅といわれる黒の色と金だけだと思うのですが、顔などのほげたあとに違う色などが上からかぶせられていたという形跡は残ってはいないのでしょうか？あと、膨らんでいる部分に基本は金がかぶせてあったのでしょうか？

川見

他の色を使っているとしても銀くらいです。基本的には赤銅と金、または銀が使われており、それ以外のものを色とりどりに使っていたというのは、少なくとも古い時代にはなかったと思われます。

また、膨らんでいるところ、立体に見えるところは全部金がかぶさっていたのかどうか、その痕跡があるのかどうかということですね。おそらく金が残っているところは、全てかぶさっていたと思うのですが、この袋（図 20-1）とこの袋（図 20-2）はかぶさっていなかったというふうに思います。というのも、この縛っている紐（図 20-3）の部分は最も金のとれにくい部分です。なので、この辺（図 20-4）には金が残っていてしかるべきだろうとおもわれます。しかし、金は残っていない



図 17 五足龍図目貫



図 18 五足龍図目貫



図 19 ヒゲ

いので、袋も金を貼ったものと赤銅のまま残すものがあったのだと思います。そのため、大黒が背負っている袋以外の部分では、おそらく赤銅のまま残してあったところもあったと思われます。また、目や顔などの盛り上がっている部分は、長年、伝世する中で擦り切れてしまい、顔などはほとんどわからなく、ツルツルになってしまっています。しかし、よくみますと目が彫っており、鼻もちゃんとあったと思われます。

質問者

大黒の目(図 21-1)の部分が、塗金のように見え、左目が三角形の目にみえるのですが。

川見

私は、笑っている目の細い線かと思っていたのですが、目の玉も彫っていますね。そうだとすると彫った



図 20-1 この袋

図 20-2 この袋

だけじゃなく、何かを入れていた可能性があります。しかし、そこまではわかりません。

質問者

金以外、たとえば銀などをかぶせるということもあるのですか？

川見

この作品がつくられた江戸時代初めくらいでは、銀をかぶせた作品は見られません。

質問者

後藤光乗の「弓に籠図」の作品について質問させていただきます。紐（図 22-1）の部分が、金着せなのか、少し色の悪いようにみえるのですが、これはどう考えたらいいですか？水銀メッキですか？

川見

金をかぶせているのだと思うのですが。

質問者

かぶせているのなら、金が剥げているのですか？

川見

もしくは変色したか、何かが付着しているのだと思います。

質問者

葉の文様は、金をかぶせているようにはちょっと見えないですね？

川見

私は象嵌だと思っています。

図 21-1 目



図 22-1 紐

質問者

私は象嵌だと思えません。桐の葉の外側にも金が、はみ出ている部分（図 23-1）をみて思ったのですが、それは、彫ってから、アマルガムによるメッキを施したためではないかと思うのですが、そのような痕跡はないのですか？象嵌ならば象嵌の埋めてある線がはっきり見えますよね。

また、右端の葉（図 23-2）の表現は、うつとりではできない気がしますし、象嵌でもないように思われます。これは技法から考えて、本当に後藤家の物なのでしょうか？私は五三の桐がこんなふう雑に表現されることはないかと思うのですが。

川見

まず技法のことですが、私が当初考えていたのは、象嵌をした後に、表面を磨き、その上から彫っていると考えていたのですが、確かに、このあたり（図 23-1、2）をみていると、象嵌では、このような切れ込みや、ここだけピョコっと出ることなく、もうすこし整った形になると思われます。また、うつとりや、薄い板をかぶせたような様態でもないので、塗金の可能性があります。しかし、この時期の後藤家の作品で、塗金をしてあるものは、現在残っているレベルの高い作品群の中では、あまり見当たりません。もしかすると、あ

図 23-3 鏑矢の先



図 23-1 金のはみ出ている部分

図 23-2 右端の葉

まり上等ではない作品の中にはあるかもしれませんが、よくわかりません。

では、この作品は後藤家の作品なのか。技法の面から疑わしい点もあると思いますが、時代的には、古いものだと思います。この作品は江戸時代前期のものだと考えられています。また、この時代に『金工鑑定秘訣』という本が出ており、その中には後藤家のものとして本作品と同じような図柄が出ています。そのため図柄的には後藤家のものだと考えられます。しかし、技法的な面はまだ考えていかないとわかりません。私が特に疑問に思うのは、この紐(図22-1)の部分です。これは上の金が取れて銀が出ているのか、もしくは何か違う作用があるのか。もっと時代をさかのぼるなかで、他にも同じようなものがありますので、なかなか釈然としない様態は確かに色々あります。

質問者

後藤家であれば金メッキはないということですか。

川見

そんなこともないと思うのですが、確かに、鏑矢の先(図23-3)も金メッキに見えますね。

質問者

紐(図24-1)の部分は金の色が違って見えるのですが。

質問者

やはりメッキであればそういう感じになりますよね。象嵌とかうつとりだと金の色が残りますので。

川見

では、金が薄くなっているのは下に銀かなにかがあ

図24-3 弓



図24-1 紐

図24-2 この辺り

るとお考えですか。

質問者

銀があるとは考えていません。メッキは水銀をくっつけて金をのせ、良いやつは上からヘラでこすって残っている金の粒をきれいにピタッと貼るのです。例えば天平の仏像などで、本当にいいメッキをしているものはきれいですよ。金を薄くすると、このようになるのではないかと思います。

川見

少なくとも紐の部分に関してはメッキを施してはいるが、金が薄いのだろうとお考えですね。では、この辺り(図24-2)は残りがよいために、割りと残っているということですか？

質問者

水銀をのせていくのは非常にのりにくく、どうしてものりやすいところと、のりにくいところでムラが出てくるだろうと思います。また、こすれるところと、こすれないところの差はあるでしょうが、やはりこういう出来上がりの差としても出るのではないかと思います。

川見

ならば、金の部分は全部メッキだと思いですか。

質問者

いえ。何か弓(図24-3)の辺りの出来は、メッキではない気がします。

質問者

鏑矢の先と、羽(図25)の部分の色が違うのですが、羽は銀ですか？

川見

はい。銀を埋めているのだと思われます。

質問者

そうですね。銀象嵌でしょうね。

質問者

今、作品は後藤家のものであるということを説明さ

図 25 羽



れましたが、これは一人の職人が、全部自分の作品として最初から最後までしているのですか？職人が分業で作っている、などということは考えられないですか？

川見

充分にありうると思っています。

質問者

これくらいのものになれば、オーダーがあり、いいものがほしいと思っている高貴な方の特別注文であろうと推測されるのですが、そうした場合などに、仕事の技量はその部分によって、一つの作品でも違うということではないでしょうか。だからきれいに残っているところは、かなり高度なテクニックを持っている方が担当したなど、後藤家の中で分業があったかどうかはわからないのですか？

川見

後藤家がどのような体制で制作を、各時代によってしていたのかという研究が必要になってきますね。また、今の鑑定で作者が確定したとされる作品も、その作者が、どこまで手を入れているのかなどの問題が出てきます。しかし、史料や文献で残っている古文書などに基づいた研究では見当たりません。だからまず、そこから研究すべきだとおもいます。分業しているなら、どういった体制で分業しているのか、など調べていく必要がありますね。しかし、実際の作品をみて議論をする、という今までの研究方法に対し、文献での裏づけということは、なかなか進んでいない状況だと考えています。

質問者

僕は絶対、後藤家は分業をしていたと思います。後藤の当主だけが魚々子を打つのではなく、専門に打っている職人がいるからこそ、あんなに美しく、素晴らしい魚々子を打てるのだと思います。そして最終的には当主または責任者が作品をチェックし、これをお客さまのもとへ納めるのだと思います。だから、みたときにメッキがおかしい、図柄がおかしいなどと言われるような作品は絶対、後藤家から出てこないと思います。

大切なのは、分業の有無ではなく、後藤家という素晴らしい芸術家集団があり、分業で作品を作るのだけれども、作品が出てくるときにはきちんとチェックされ、素晴らしいものしか出てこないからこそ、作品が評価されるのです。だから、鑑定するときには、まずその作品をみて、評価をするということが出発点だと考えています。

川見

もちろん、そうだと考えています。しかし、その前提として本当に後藤家の作品なのかということや、同時代で、後藤家の作風を真似たようなものがでてくる素地があるのかなど、研究する余地はたくさんあると思います。

質問者

ブランドにはアウトレットがありますよね。同じように後藤家ブランドでよくできた作品は、後藤家のものとして売る一方で、B級品は後藤ではない他の名前を出したということはないのですか？

川見

当主が最終的にチェックするとしたら、そこで外されたものが出されているということですね。

質問者

そういうことがあるのではないかと思います。手間をかけたものを捨てるということはないでしょうか？

質問者

彫金などにおいては、弟子が作った下手な作品は、それ以上作らせないために、師匠がとりあえずつぶすとよく聞きます。だから私は後藤家からでてくる品物

のなかで、変なものは絶対はないと思うのですが。

質問者

つぶすところはよくテレビとかで、名人芸としてみせませんが、現実にはそうではなく、名前を変えて出すとかあるのではないかと思います。

質問者

そんなことをするのが後藤なのか、そうでないかの境目じゃないかと思いますが。

川見

そもそも、それは後藤家をどのように評価するかということが重要になってくると思います。裏では何をしているかということや、そんなことが本当にあったのかどうかということは、結局残っている作品をどう評価するのかということ。また、その作品を本当に後藤家がつくっているのかどうかという疑問は切り離して考えていく必要があると思います。

質問者

私は、室町末期から桃山、江戸初期にかけて後藤家をまねてつくった作品は、よい物であれば、後藤の中に紛れ込んでも構わないと思います。それは仕方のないことです。

しかし、本当にいい作品なのかどうかということは、我々が見極め、吟味して選んでいかないとはいけません。後世に、いいかげんなものを後藤のものとして伝えていくと、それは将来、我々が笑われることになりすから。

質問者

作品について話を聞きたいことがあります。そのこの弓の所、銀の弓と金色の曲がりくねっているところの**交点** (図 26-1) のところについてです。まず、曲がりくねっている部分は何かということを知りたいです。また、金色と銀のまがり角、交差のところに、上の金が弓のほうにかぶっていますね。その下の部分 (図 26-2) にはメッキがはがれている様子は見えませんか？

質問者

金が銀と接していると、銀が金のほうへうつって

き、金が汚れたりしますね。しかし、金が銀のほうへ移ることはありません。今ご指摘のあった所は、金が銀の部分にはみ出ているので、メッキであると考えられます。

質問者

曲がりくねっている部分の、上側に**線** (図 26-3) が入っているのは、何かの表現でしょうか？

川見

この線は表現だと思います。彫っていますね。

質問者

今、指摘されている**S字型** (図 26-4) のものは、何を表現しているのですか？

川見

これは布もしくは紐だと思うのですが、具体的に何を表現しているかはわかりません。弓や矢に関連するものなのか、それとも単なるデザインなのか、よくわかりませんが、わかる方いらっしゃいますか？

質問者

矢を入れる籠の紐だと思います。

川見

そのようなことも含め、調べておきます。

図 26-1 交点



図 26-2 部分

図 26-3 線

図 26-4 S字型

荒木東明の作品について

川見

次に幕末から明治期の荒木東明(図27)の作品を見ていきましょう。彼は粟穂の表現を得意にしています。では彼の粟の穂はどのようになっているかというのと、金の塊に、穂の粒が表現されています。穂の粒の塊は一つの単位(図28-1)になっています。この単位は規格性があります。それは、真ん中にひとつ突起(図28-2)があり、そのまわりを6つの粒(図28-3)が規則正しく並べられています。この固まりを規則正しく並べ、粟穂の図を表現しています。

ここから、つくり方を類推してみると、まずは塊の



図27 荒木東明 粟穂図大目貫

図28-1 単位



図28-3 粒

図28-2 突起

状態をつくらないといけないので、穴を開けてゆき、穂の一つの単位を形作っています。その次に鑿を使います。似ている物として、先程の後藤家の刀装具で小柄や笄には魚々子という、魚の小さい卵をしきつめたような文様がありますが、それは恐らく先をドーム型にへこませた棒状のものを上から錘で打って並べていくという技法だと思います。しかし、本作はそのような魚々子の表現よりは少し尖っており、やや丸みのある円錐状をしているので、先が突起状にへこんでいる鑿を打っていくのだと考えられます。そのため、その周囲にちょっとへこんでいる部分があります。

では、粟穂の東明だといわれるほど、同じ意匠の作品がたくさんありますので、別の作品を見ていきましょう。この作品(図29)は小柄ですが、穂のひとつの単位がわかりにくいのです。これがひとつの単位(図30-1)だとすると、先ほどの作品は真ん中を6つの粒が周囲を囲っていたのですが、こちらの粒(図30-2)は5個しかありません。粒の数が統一されておらず、並び方も整然となっていません。また、細かく一個一個の鑿の形を見ていきますと、先ほどの作品はやや丸みがありながらも尖っていたと思うのですが、本作はそれに比べると丸みが強くなっています。よって、使われた道具も、作者の意識も両者では違うのではないかと思います。では、このようなものが、簡単に贋作だと決められるかというのと、そこには色々と考えないと

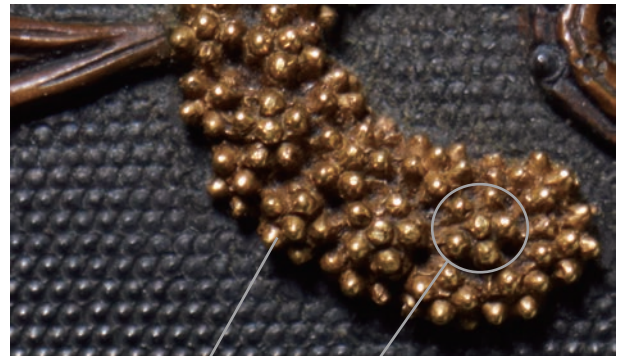


図30-2 粒

図30-1 単位



図29 荒木東明 粟穂図小柄



図 31 荒木東明 粟穂図目貫

いけない問題が出てきます。

この作品(図 31)は、拵こしらえに付属していて、同じような粟穂の目貫が付いています。これも先ほどの小柄に近い表現で、一個一個の単位の数が中心に1個、まわりに6個にはなっていません。周りの粒(図 32-1)は5個であったりとか6個であったりで、数がそろっておらず、一番はじめの目貫とは、意識が全く違うでしょう。



図 32-1 粒

次の作品(図 33)の拵を見ますと、穂の単位は、真ん中に粒が1つあり、周囲に粒(図 34-1)が6つ並んでいます。しかし、最初の作品と比べると、割付に対する意識が違います。最初の作品はもっとかっちりかちりと並んでいるのに対し、こちらは不規則な並び方をしています。また、一個の粒の形をみても、最初の作品はやや丸みがあって、円錐形をしています。こちらは相当とがっています。また、向いている方向もばらばらです。よって使われている道具も異なることがわかります。これは東明という人の、個人の中での道具



図 33 荒木東明 粟穂に鶉図小柄



図 34-1 粒

の変化、あるいは技能の変化、進展なのか、あるいは全く別の人がつくったものなのか、それらの疑問はさらに広く作品をみていかなないとなかなか判断はつきません。しかし、このようなものをよくみると、同じ粟穂という表現の中でも違いがみえてきます。

質疑応答

質問者

真贋を考える上で、立体感をどのように表現しているかというのは非常に重要な問題です。粟穂の方向の違いは、立体を表す以上、当然、問題になることだと思います。例えば、上の方に並んでいる粟穂は、上の方に向かって伸びていますし、下の方に並んでいるものは下の方に向かって伸びています。最初と最後に映された作品に関してはそれがなされていたと思うのですが、その差、粟穂一つ一つの向きによって現れる立体性というのは、どう感じましたか。

川見

私は、粟穂の方向に合理性がないとだめだと思うのです。最初の作品は、粟穂が同じ方向を向いている、という意味ではなく、ある程度の規則性のもと、広がりを持った放射状になるように考えてつくっています。しかし、二つ目の作品は、並び方が少しバラバラに感じられます。規則性がある放射状の広がりを持った方向性があるわけではなく、散漫な気がします。

質問者

二番目の作品(図 33)の目貫は比較的、穂先の方向を意識していると思うのですが。

川見

その点では、作品のつくり方やつくる意識が一番はじめの作品に近いと思いますが、一個一個の単位としての形、また、一粒一粒が尖っているというところで違いはあると思います。

この作品(図33)の縁(図35-1)を見てみましょう。下地は魚々子地(図35-2)で、先のへこんだ鑿で一定方向に打っています。粟穂の部分は、魚々子と非常に良く似ていますが、へこみの形が異なる鑿で打っていると思います。

質問者

木工で先程のような粟の実(図36-1)を作る場合、ひとつの、先端がへこんだ鑿で打つというのではなく、丸刀で3回とか4回打って一つの丸をつくりますよね。粟の形がみんな違うし、片側に強く刃が当たっているので、一個の鑿で打ったのではなく、丸刀のようなもので3回か4回うって、ひとつの実をつくったのではないのでしょうか？

川見

一つの粒をこういう形の工具ではなく、丸刀で2回あるいは3回打って作るということですか？

質問者

一つ一つの形が必ずしも一定じゃないので、そのような打ち方をするのではないかと思ったのですが、金属工芸はやはり1本で打つのですか？



図 35-2 魚々子地

図 35-1 縁

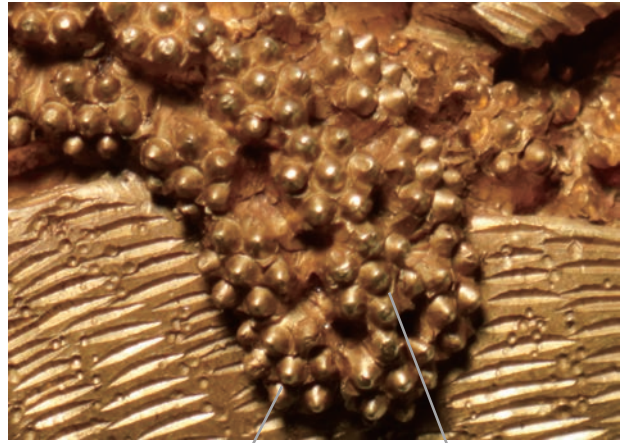


図 36-1 粟の実

図 36-2 円錐のまわり

川見

多少、力加減などによって、一個一個の形にばらつきがあるのは、あり得ることだと思います。たしかに、一個の円錐形の中にいくつかの面があるような気もしますが、ただ一粒一粒に何手かをかけていたとは思えません。というのも、そこまで細かい細工ができるのかという疑問が残ります。では、どうして円錐の中に面があるのかというと、作ったあとは金がやわらかいために、ダメージとして面ができてしまっているのかと考えられます。ただ、鑿か丸刀かの決め手になるのは、この円錐の形状よりも、円錐のまわり(図36-2)がどうなっているかだと思うのですが。

質問者

一本で打ったのならば、まわりは、スタンプをしたように粒一つ一つが同じ形になると思うのですが。

川見

まわりに打っているものは、重なり合います。なので、重なっている部分はどうしても、あとで打った方の侵食をうけています。

質問者

一番はじめての作品よりも、後者の作品群の方が、粒が揃っていて、細かくみえるのですが、作品の大きさが違うからですか？

川見

いいえ。作品の大きさは全て、それほどかわらないと思います。

質問者

私は、それぞれの作品に全体のニュアンスがあると思うのです。蓑や薦で包んでいる粟は、まだ取ってきたばかりで、一番荒いのです。そうすると、粟の一つ一つはやっぱり荒い表現、強い表現でないといけませんよね。一方で、後者の作品はもっとやわらかく優しい表現だとおもいます。優しい表現のときに、荒い実をつけないから、両者は違ってくるのではないのでしょうか？あまりにも部分でとられすぎず、全体の表現でとらえる必要があると思います。

川見

工具を変えて、表現しているとおもいますか？

質問者

工具はもちろん変えると思います。

質問者

確かに、地面から生えているものの表現と、収穫後の表現は、違う可能性はありますね。そう考えると、表現の違いから、作者が違うとまで言い切れないかもしれません。年齢の問題もありますし……。

下地の制作方法について

川見

最後の作品にいきましょう。後藤家は魚々子打ちで余白をうめますが、しだいに町人の文化が発達してくると、「町彫」といわれる後藤家以外の、色んな技法、

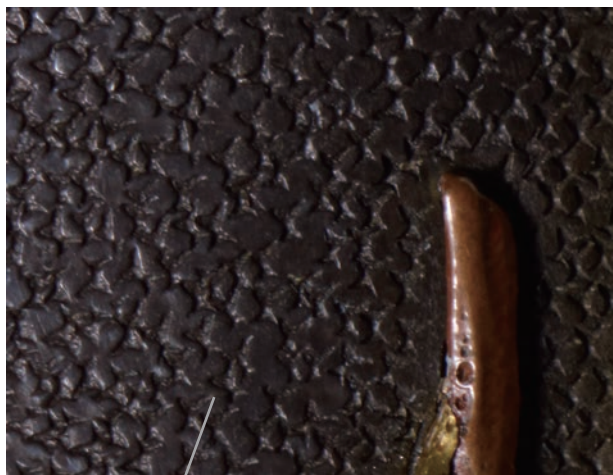


図 38-1 下地

色んな金属を用いた人たちがどんどん出てきました。下地も、魚々子以外のものが色々でてきたので、そのような作品を見てみましょう。

この作品(図 37)の下地は、琴柱型のような Y 字で、下がちょっと広がっているような形の鑿で、打っていると思われます。当たる角度によって多少変化があるのですが、魚々子ではないまた別の特殊な鑿で下地(図 38-1)をうめています。

次の作品(図 39)にいきましょう。この作品は、横方向(図 40-1)に鑿で削っています。金工よりも木工で使われていそうな表現ですが、横方向にガガガッと削っていき、あらした地にしています。

次の作品(図 41)にいきましょう。もう少し特殊な作品ですと、その彫ったところを金でうめる、梨地象嵌という技法がでてきます。これは漆工などで使うような梨地に近いので、そう呼ばれたりもしています。本作品は、Y 字型の鑿と丸い鑿、2 種類の鑿で彫った所に金を象嵌しているとおもわれます。



図 37 大月光弘 寿老図小柄

質疑応答

質問者

これは、象嵌ではなく、鑿でへこませたところに水銀象嵌、つまりメッキをし、仕上げしてから、平象嵌をうめたのではないのでしょうか？これを一個ずつ埋めていったとは考えられないのですが。

川見

なるほど。では、粒状のものを埋めていったわけではないと、お考えですね。



図 39 村上如竹 勝虫図小柄

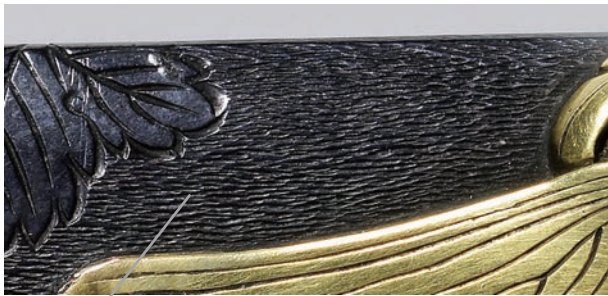


図 40-1 横方向



図 41 大森英秀 野路の玉川図縁頭

質問者

まず、ハンマーあるいは鑿で下地を荒らし、その上から水銀でメッキかけるのです。下地はデコボコになりますから、ヘラでこすり、金を残したのでしょうか。これはそういう技法だと思うのですが。

川見

だから、様々な形ができるのですね。

質問者

だとすれば削り残したところが見えるのではないのでしょうか？

質問者

この作品は下地を先につくり、後から象嵌で模様をはめているのだとおもいます。

質問者

では、草の辺り（図 42-1）のざらざらしている部分は何でしょう？

質問者

草の辺りが、ざらざらしているのは、象嵌をするときに、銅がぬけてこないようにするために、はめ込んでたたくからではないかと思えます。

川見

その技法は今もなされている技法なんですか？

質問者

やっていると思います。

川見

この技法だと金が抜けたりはしないのですね。

質問者

はい。水銀象嵌は、水銀を完全にとばしますから、金はきちっと残ります。下地の処理がいい加減でない限り、完全に金がくいつきます。

川見

彫って金で埋めると、金が抜けてしまうのですね。



図 42-1 草の辺り

質問者

はい。それに、彫って金をうめるときは、かなりの深さがいります。この作品は、抜けたようなところがひとつもなく、非常に細かいので、このような方法を用いたのではないかと思います。

川見

ということは、彫りは、浅い彫りで充分いけるということですか？

質問者

いいえ。そういうわけではありません。本作はでこぼこにしてから削らないといけないので、メッキの厚さは深いと思います。

そこに見られる筋や細かい傷は、あとから飛び出した金を削った跡だと思います。その後、溝を彫って、文様の銅や銀をうめたんじゃないかと思います。

川見

似たような作品がもう一点ありますので、見てみましょう。岩本寛利作《鰻に藻図 小柄》(図43)の裏側です。丸い金(図44-1)の様子が施されています。

質問者

これも、丸い鑿をたくさん打ち込んでおき、その表面をあらし、水銀と金のアマルガムを薄く塗って、水銀をとばしたのでしょうか。これも一個一個象嵌を、やったというふうには思えないでしょうか？

川見

それは、職人の間ではよく行われる技法なのですか？

質問者

はい。ただし、プロの方は、素人にやり方を絶対教

えてはくれませんね。

川見

なるほど。活発、かつ貴重なご意見、ありがとうございます。

司会 (黒川古文化研究所 研究員 杉本欣久氏)

今、大変ありがたいご意見をたくさんいただきました。研究者というものは狭い世界でやっていますので、もっと他の考え方を聞くことによって、はじめて客観性というのが出てきます。多くのご意見を聞いて、その中で研究者が自分で選び取り、最終的に自分がどういふ説を述べるのかということ。それが客観性だと思います。今回の催しをきっかけにして、再びスタート地点に立ち、すすんでいく。こういうことを繰り返す必要性がお分かりいただけたと思います。これが研究の基本だと思います。当たり前のことがわからない、ということが本当にたくさんあります。その時、皆様のご意見とお力添えというのがあって、はじめて研究が進んでいく。そして、私たちの研究が社会性を帯びてくるものと思います。

今後もこういう研究会、公開研究会という形で続けていきたいと考えています。本日はたくさんのご意見いただきまして、どうもありがとうございました。

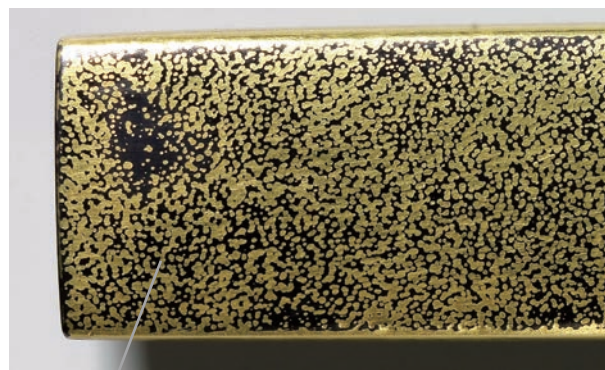


図44-1 丸い金



図43 岩本寛利 鰻に藻図小柄